

旧約聖書を読んで感じること(101) ヨブ 事の起こり(1)



Job (1880) Léon J. F. Bonnat

ヨブ記は旧約聖書では最古の知恵文学とされています。42章にもわたる大部の詩文で、豊富な語彙で広範囲にわたる諸相を描き、形式は議論、問答、背景はユダヤ教ですから、私のような単なる主婦が読んで、鑑賞したり、理解できるものではないと、最初から、ギブアップをしました。それでも「読みなさい」と言われている聖書なので、さりと読んで、感じるままに記したいと思います。

「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。」(ヨブ1:1)とヨブを紹介していることから、ヨブは、かつては「義人」というあだ名がつけられていました。新共同訳聖書には義人という言葉はなく、「正しい人」という訳がなされています。ところが、パウロは、「正しい者はいない。一人もない」(ローマ3:10b)と言っていますから、ヨブに付けられたあだ名は間違

っていたのです。むしろ「義人」、「正しい人」はイエス様以外にないというのが、キリスト教の信仰告白です。旧約の時代は、律法の世界ですから、「正しさ」を問うのです。それがヨブ記のテーマとっていいかもしれません。ヨブ記を簡単に8つの部分に分けて考えてみました。

題	章	内容
(1) 事の起こり	1~3	神の試練による、東国一の富豪ヨブの没落、艱難
(2) ヨブと三人の友の議論(一)	4~14	神は罪の裁きとして艱難を与えるのか
(3) ヨブと三人の友の議論(二)	15~21	人間はどのような罪を犯すのか
(4) ヨブと三人の友の議論(三)	22~27	人間と神との隔たり
(5) ヨブの独白	28~31	見えない、悟り得ない神と嘆きの人間
(6) 謎の人工リフの怒りの言葉	32~37	神の裁きの受け止め方
(7) 主なる神の言葉	38~41	神の支配は不可知であり、完璧である
(8) ヨブの言葉と結び	42	完全な悔い改めによる救いと回復

正しい人とみなされるヨブが神から試練を受け、財産、家族をすべて失います。けれども、神はヨブが罪あるゆえに試練を与えたのではなく、ヨブの信仰は幸福、利益のゆえと思うサタンの疑問に答えるためにサタンに許された出来事でした。この時ヨブは、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」(ヨブ 1:21)と言って、神への信仰を失いませんでした。ヨブの言葉の前半は人間の誕生と死の事実として受容できますが、後半の言葉、人間を冷徹に支配する主を賛美するという部分にすんなりいかないのが人間の常です。

さらに「皮膚病」という当時もっとも忌み嫌われる病気にかかり、苦しみます。その時、ヨブの苦しみを見かねて、ヨブの妻は激しい言葉を言っています。

彼の妻は、「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」(ヨブ2:9)妻はヨブの苦しみを見かねて、苦しみから解放されるには死しかないと思ったのでしょう。それだけではなく、このような苦しみを無垢な人間に与える神へ、怒り、罵り、悪態は当然であると考えていることがわかります。ヨブは自分に与えられた艱難は不幸だと認識しつつも、神から与えられたものとして、受容するのです。ヨブの信仰と、艱難に苦しむごく普通の人間の心理が対照的に描かれ、私たちは普通の人間でありながら、ヨブの言葉にひかれます。